

インスリン非依存型糖尿病に合併した AFP 産生胃癌の 3 症例

—高血糖, 高インスリン血症は胃発癌因子に成り得るか—

なが み はる ひこ
長 見 晴 彦

キーワード：インスリン非依存型糖尿病, 高血糖,
インスリン抵抗性, AFP 産生胃癌

要 旨

今回、インスリン非依存型糖尿病（Ⅱ型糖尿病）を合併した AFP 産生胃癌の 3 症例を経験した。3 症例とも糖尿病は重症型で、内服薬のみではコントロールが難しく、インスリン治療が施行されていた。この 3 症例において AFP が胃癌細胞から産生されている事実を確認するため切除標本あるいは生検組織の腫瘍細胞を抗 AFP 抗体を用いて peroxidase anti peroxidase (PAP) 法により免疫染色したところ胃癌腫瘍細胞内に AFP が局在する事を確認した。予後は 3 症例とも悪く肝転移にて癌死した。一般に糖尿病は動脈硬化性疾患を始めとした多彩な合併症を引き起こすが、近年悪性腫瘍との関係が注目されるようになった。疫学的調査によれば空腹時血糖の上昇は他の危険因子と独立した胃癌発症の有意な危険因子と言われている。また胃癌の発癌機序については高血糖による胃細胞内の DNA 損傷、糖尿病におけるインスリン抵抗性にともなう高インスリン血症が胃癌発癌に関与している可能性も考えられている。

はじめに

肝癌の一般的な腫瘍マーカーである Alpha-fetoprotein (AFP) 産生胃癌の報告例は近年増加しているが、その予後は非常に悪く、仮に外科的切除、術後化学療法施行例でも、早期に肝転移

を来し易く早期死亡例が多い^{1,2)}。一方、糖尿病、特にインスリン非依存型糖尿病の病態は膵β細胞におけるインスリン分泌不全や肝臓、骨格筋、脂肪組織などの標的臓器におけるインスリン抵抗性とその主要因であり、またインスリン抵抗性はメタボリックシンドロームにおける増悪因子でもある。

本邦では食生活の欧米化に伴い糖尿病の罹患率は年々増加傾向にあり、糖尿病前段階状態の症例

Haruhiko NAGAMI

長見クリニック

連絡先：〒699-1311 雲南市木次町里方633-1